TOKIWA, DAIJŌ
SHINA BUKKYŌ NO KENKYŪ

文學博士 常盤大定 著

支那佛教の研究

名著出版

隋の靈裕と三階教の七階佛名

一、緒　言

支那河南省彰德府は、古の六朝時代の鄴都、唐時代の相州で、佛教史上有名な土地である。佛教の中心地は、時代によつて異るが、其中に於て、特に注目せらるべきは、北方にては洛陽・鄴・長安、南方にては南京・廬山である。その中、鄴都には、前に後趙の佛圖澄があり、中ごろ北齊の僧稠・慧光・道憑・慧可があり、後に隋唐の靈裕・慧休があり。是等の學德が、この地を中心として四隣を風化せる事は、佛教史上の著しき事實である。

彰德府の西南七十五支里に、寶山靈泉寺といふ名刹がある。予は大正十年十月を以て、こゝを踏査した。この靈泉寺は六朝以來の名刹で、實に魏末の道憑が基礎を置き、弟子の靈裕が一代の苦辛經營によつて、之を完成したものである。その事は、唐の道宣の「續高僧傳」の中に見えて居る。こゝに二つの石窟がある。一は大留聖窟と名けられ、他は大住聖窟と名けられる。前者は魏代の造、後者は隋代の造である。石窟の外に、隋の靈裕塔があり、唐の玄林塔があり、其他靈裕・慧休を初め多くの學德の灰身塔がある。道憑の石像もあつたとあるが、今は無い。是等はいづれも、注意せらるべきもので、共に「支那佛教史蹟」第三輯の中に收められ、また之に關して諸所に報告したから、多く言ふの要が無い。自分は、かねて寶山寺の史的價値について述べて居たが、石窟の刻經を調査して居る間に、矢吹慶輝博士が、本年十月の「思想」の中に載せられた「三階教」の七階佛名に大なる暗示を得て、靈裕と三階教との間に何等かの連絡がありはしまいかと思ふので、之に關して、既に兄に其一端を語り、寫眞も「三階教の研究」中に載つて居るが、其後やゝ委しく取調べを進めたので、不十分ではあるが、一應之を書いて見る事としたのである。

予は、かねて支那佛教史上に於て、宗教味の溢るる宗派に接する事の少いのに不滿を感じつゝある。現今至る所に見られ

るものは、卑近な功利的な祈禱宗に過ぎぬかの感を懐かしめる。古の曇鸞の念佛には、實に立派な救濟卽解脫教といふべき妙味が掬せられ、その後を承けた道綽・善導があるけれども、此他の念佛は、よし一天四海を風靡するにせよ、要するに附屬の念佛である。支那佛教史上、曇鸞流以外に、眞に宗教の骨髓を得たといふべきものが無かつたであらうか。隋唐の佛教は、所有形式を具へて居る。此中に宗教の眞髓を得たものが敢て善導のみと限るまい。人間の根本欲求を見つめて、人間のまゝにして救濟せらるべき福音を說いたものは、善導以外に無い事はあるまい。宗教である以上は、講論佛教・戒定佛教の外に、信念佛教の無い道理は無いと思つて居た。この渴仰に對して大なる啓發を與へたものは、實に三階教である。勿論これについても、猶多くの疑問がある。その著しいものは、普佛の信仰である。この宗教が、果して普佛のみに彼が如き力を得たものであらうか。恐らくはその所尊として普佛以外のものがあらねばならぬと思ふが、これは猶多くの綿密な檢討を要する。予は、三階教の普敬認惡・將藥破病の宗旨に大なる共鳴を感ずる。よし、淨土教徒より大なる非難を蒙つたにせよ、兩教の間に密接なる交涉のあつたのは、實に此點になければならぬと思ふ。

三階教は、新に傳つた世親佛教の中に醞釀せられたと思はれる。世親佛教の傳來は、實に當時の支那佛教に活を與へたものであつた。予は、かねて世親佛教直接の產物として、「淨土論」によつて成れる曇鸞の淨土教、「楞伽經」によつて成れる慧可の禪宗を數へて居るが、若し三階教が同じく世親佛教の傳來に成れりとせば、一層多く世親佛教の支那に於ける開展を見る事となる。予のこゝに言はんとする所は、三階教祖信行禪師が、地論學系に人と成つた事、猶一層詮じつめれば、信行の養はれた地は鄴都で、而してその普佛信仰を養はしめた人は、靈裕でありはしまいかといふにある。信行の系統は、大略次の樣なものであつたと思ふ。

慧光―法上―慧遠
　　―道憑―靈裕―僧淵―智正―智儼
　　……信行

これを寶山の大住窟に得た刻像刻經の上について、見て行きたいと思ふ。材料は悉く「支那佛教史蹟」第三輯の中に出て居る。

二、河南寶山の大住聖窟

初唐の道宣は、その大著「續高僧傳」第九の中に於て、靈裕法師を傳するに當り、法師の生活が、頗る嚴肅主義によりて終始せるに對して、大に同感せりと見え、椽大の筆を振つて、大に法師を稱讚して居る。中に於て、寶山靈泉寺に石窟を造れる事を叙述して、次の樣に言つて居る。

後於寶山、造石窟一所、名爲金剛性力住持那羅延窟、面別鐫法滅之相、山幽林竦、言切事彰、每春遊山之僧、皆往尋其文理、讀者莫不歔欷而持操矣、其遺跡感人如此。

靈裕の造つたのは、開皇九年（西曆五八九）で、此石窟は、現存して居る。壁刻に大住聖窟とあるのは、法師自身の名けたものである。入口外壁の左右に、那羅延神王と迦毘羅神王とを刻して居るのは、二神王の護持によつて、之を千載に傳へんを期したものである。大住窟、委しくは金剛性力住持那羅延窟と言ふべきで、大住の稱は、蓋し住持の住を取つたものに相違無い。

支那の石窟甚だ多しと雖も、之を經營した高僧の名の明瞭なるは、大同雲岡の魏の曇曜と、この隋の靈裕のみと言つてよい。寶山の石窟は唯二つで、而も左程に大きいもので無いから、その規模の點に於て、到底雲岡に比すべくも無い。然し事

蹟の明瞭なるに至つては、曇曜のは到底靈裕のに比すべくも無い。靈裕が、如何なる時節に於て、如何なる動機より、之を經營せしかが、すべて明瞭なるのみならず、其用功の數までも明白に記されて居る。此點に於て、寶山の石窟は、佛教文化史上、實に重要の位置を占めるのである。大住窟内の三尊、幷に内外壁の刻像及び刻經は、左の如き數に及んで居る。是等の中、刻經に於て、最も多く靈裕の精神及び寓意を徴する事が出來る。あまりに繁雜となるから、之を表にして、一目瞭然たらしめる事とする。

窟内　正面及び左右面の刻像
　盧舍那佛及兩脇侍、阿彌陀佛及兩脇侍、彌勒佛及兩脇侍
窟内　四隅柱の刻像
　過去七佛　三十五佛
窟内　入口左右及上方壁刻
　右方　「大集經」月藏分中、五五百年の文
　　「摩訶摩耶經」中、最初の文
　上方　「法華經」
　左方　世尊去世傳法聖師廿四祖陰刻像
窟外　入口左方及上方壁刻
　向つて右方　那羅延神王像
　向つて左方　迦毘羅神王像
　二神王の上方　歎三寶偈、及び「法華經」自我偈
外壁の刻像刻經
　阿彌陀三尊線刻、及び幾多の小佛龕
　「勝鬘經」一乘章中、讃嘆如來の文
　「大集經」月藏分中、法滅盡品の初の文
　「涅槃經」中、雪山童子捨身求法の無常偈
　「法華經」分別功德品中の文
　普光佛以下の五十三佛名
　寶集佛以下の二十五佛名
　東方須彌燈光明佛以下の十佛名
　懺悔文

是等の中に、三階教との關係に於て、注意せらるべきものが頗る多い。五五百年の文・法滅盡の文・五十三佛名・二十五佛名・十佛名・幷に廿四祖像で、是等の中に、靈裕の精神も信念も躍動して居る。

三、「大集經」五五百年の文

「大集月藏經」十卷は、北齊の那連提黎耶舎が、天統二年（西暦五六六）に於て傳譯せる所で、實に北周の武帝が、建德三年（西暦五七四）に於て、釋道二教を廢せる僅々八年以前に過ぎぬ。その中に於ける五五百年、及び法滅盡の文は、此廢佛事件によつて、甚大なる刺激を佛徒に與へたものである。支那の廢佛事件は、四回あるけれども、北周の廢佛ほど、重大な

意義を有するものは無い。周武は實に英明の君主であつた。思想もあり、辯力もあり、手腕もあり、且つ年齢も若く、時運が宛も斯る英主を要求する時に當つて、武帝の天下統一の要求から現はれた此社會的大動亂は、物心二面に於て大なる結果を作り、それが實に文明轉回の機會となつたのである。それだけ、佛教徒に取つて、重大なる意義を有したのであつた。正しく法滅盡の相とも見るべき現實に對面した佛教徒は、この五五百年の經說・法滅盡の經說を、水火の體驗を通して、身讀したのであつた。而してこの經說に注意せし最初の人は、恐くは靈裕であつたらうと思ふ。其後、唐初の心ある學德は、いづれもこれに注意したのである。「大集經」月藏分第十二、分布閻浮提品第十七から、五五百年を摘出すれば、次の如くになる。

佛滅後五百年――解脫堅固
後五百年――禪定三昧堅固
後五百年――讀誦多聞堅固
後五百年――多造塔寺堅固
後五百年――鬪諍言訟、白法隱沒、損減堅固

是等五個の五百年の中に於て、いつから末法となるかといふに、正法千年像法千年說・正法千年像法五百年說・正法像法各五百年說・正法千年像法千年末法萬年說の諸說あるが、靈裕の取つた所のものが如何なるものであつたか、この場合最も知りたい所である。これにつきては、當時鄴都に行はれた、正像二時の年數を知れば、それで事足りる。「歷代三寶紀」第十二に、「依二佛本行一、正法五百像法千年、今當二像末一」と言つて居るのは、當時學界に行はれた二時の年數であつたらうと思ふ。これによれば、千五百年から末法に入るので、前揭の諸說とは異る。而して當時鄴都に於て、いつを以て千五百年としたかと云ふ事を知るに付き、屈强の資料となるものは、靈裕の師道憑の道友法上の說である。法上は、鄴都に居た僧統であり、且つ靈裕との間にも交涉のある人であるから、この人の言つて居る所が、當時此地の代表的のもので、靈裕も之に從つたと見て、差支あるまい。法上、嘗て、高句麗の大丞相王高德が、僧義淵を遣はして、佛滅年代及び佛法東漸以來の變遷を問へるに對して、答へていふ。

滅度已來、至二今齊代武平七年丙申(西曆五七六)一、凡經二千四百六十五年一。

この年代に從へば、隋の大業七年(西曆六一一)が、正しく佛滅一千五百年に相當する事となる。その年代の可否は問ふ所でない。靈裕が此說を用ひて居たとすれば、彼が寶山の石窟を造り、此五五百年の經說を刻した、開皇九年(西曆五八九)は、實に佛滅千四百八十七年に當り、頗る千五百年に近かつたのである。特に之を石窟に刻した所から見れば、此經說が、如何に靈裕の心肝に徹せしかを知らねばならぬ。三階教祖信行や、淨土教祖道綽は、此經說を特に深く其宗教意識の中に取り入れて、時機相應の佛法を樹立せんと努力したのである。この經說が、信行禪師の熱血を沸かしめた事は、唐の開元四年建の三階教徒、唐淨域寺法藏禪師塔刻によつて、之を見る事が出來る。その文は、「支那佛教史蹟」の第一輯の中に收めて居る。中にいふ。

自二佛般入涅槃一、于レ今千五百年矣。聖人不レ見、正法陵夷。卽有二善華月法師、樂見離車菩薩一、愍二玆絕紐一、并演二三階一、其教未レ行、咸遭二弑戮一。有二隨信行禪師一、與二在世一造レ舟爲レ梁、大開二普敬認惡之宗、將藥破病之說一、撰成二數十餘卷一、名曰二三階集錄一。

正法の五百年なりや、はた千年なりや、而してまた像法の五百年なりや、はた千年なりやは、ここに論ずるの必要が無い。當時、「正法五百、像法千年、今當二像末一」の說があり、之に加へて、法上の佛滅年代と、法藏碑の千五百年とを併せ見る時は、鄴都の佛教徒は、今や佛滅千五百年を過ぎて、將に末法に入らんとする時運の日に非なるに、悲憤の涙を絞つたと見るべきである。靈裕は、先づこの五五百年說に注意した最初の人であつた。信行が開皇元年(五八一)四十二歲を以て、召されて京

師に入りし後、三階教を唱へたのは、全く末法相應の佛教に擬せんとしたのである。「支那佛教史蹟」第一輯に收めた信行碑に從へば、信行は靈裕より若き事、二十二歳であつた。四十二歳まで相州にありし彼は、當然靈裕の思想に影響せられたものと思はれる。信行が、開皇十四年（五九四）年五十五にして長安に寂した時、七十七歳の靈裕は猶寶山寺に康存し、其後十年を經て、大業元年（六〇六）八十八歳にして入寂したのであるが、靈裕が信行の影響を受けたと見るべきではあるまい。

四、佛　名

靈裕が歸依の熱情を捧げた所尊、換言すれば、靈裕の佛法の中に生きた佛は、何であつたらう。勿論、大住窟内の盧舍那・阿彌陀・彌勒の三尊を第一とする。靈裕は最後に「靜慮口緣念佛、相續達二于明相一」にして入寂したとあるが、恰も之を證明する如くに、特に外壁に阿彌陀三尊を線刻して居るから、こゝに慧光・道憑の師資の心中に流れた願生西方の信仰を見る事が出來る。然し、靈裕の佛法には、猶多くの諸佛があつて、靈裕は、是等の諸佛を總括して、外壁の懺悔文の中に掲げて居る。之を覩易からしめんが爲に、分類的に表出すれば、左の如くである。

……如來、過去七佛等一切諸佛
南无普光如來、五十三佛等一切諸佛
南无東方善德如來、十方佛等一切諸佛
南無拘那提如來、賢劫千佛等一切諸佛
南無釋迦牟尼如來、卅五佛等一切諸佛
南無十方无量佛等一切諸佛
南无過現未來十方三世一切諸佛
歸命懺悔、如是等一切世界諸佛世尊、常住在世。是等世尊、當二慈念我一。

これ卽ち三階教の所尊たる七階佛名の中、廿五佛及十方佛を除く所のものである。惜い哉過去七佛の前が、摩滅して居るが、而も寶山の刻劃中からこの兩者を補ふ事が出來るから、恰も七階佛名がそのまゝに具備する事となる。若し澤山の佛名を幷べた中に、七階佛名に相當するものが交つて居るといふのなら、問題は左樣に簡單に行かぬけれども、七階佛名がそのまゝに具備して、而も其外の佛名が無い。それが信行の四十二歳まで行道した鄴都にあるといふ事は、大に注目せられねばならぬのである。是に於て、更に之を窟内窟外に刻せられた佛名から見る事にする。

先づ窟内の四隅柱に、七佛・及び三十五佛の像が刻せられて居る。七佛が、北魏菩提流支譯「佛名經」の第八に見えて居る毘婆尸等の過去七佛なるは、言ふまでもない。三十五佛は、西晉竺法護譯（？）の「決定毘尼經」の中に說かれる所のもので、釋迦牟尼佛・金剛不壞佛以下である。

次に外壁に、普光佛以下の五十三佛名、東方須彌燈光明佛以下の十方佛名、寶集佛以下の廿五佛名を刻して居り、又、懺悔文の中に、拘那提如來賢劫千佛を擧げて居る。

五十三佛は、劉宋の曇良耶舍譯の「觀藥王藥上二菩薩經」に出る三劫三千佛緣起に見える所のものである。こゝに注意を要する事は、初の四十三佛名が、少しく文字を異にするものあるばかりで、同一であるけれども、最後の十佛名の全く異る事である。「縮藏」のは、明本に從へるものであるから、隋代以前に行はれたこの五十三佛名の方が、正しいと言はねばならぬ。東方須彌燈光明以下の十方佛名も、また劉宋の曇良耶舍譯の「觀藥王藥上二菩薩經」に見えて居る所である。

二十五佛名は、菩提流支譯の「佛名經」第八卷に出づる所の寶集佛以下である。

以上、三階教の七階佛名中の六階で、猶一階の佛名を缺いて居る。然るに、靈裕法師灰身塔の兩側に、靈裕傳を刻し、そ

の最後の餘白に、東方喜德如來以下の十方佛名を刻して居る。これは東晉の佛陀跋陀羅譯の「觀佛三昧經」第十、及び後秦の鳩摩羅什譯の「十住毘婆娑論」第五易行品の中に見えて居る所のものである。この十佛名の出據につきて、小野玄妙君の指示を得た事を、こゝに特に附言して置く。

以上、窟內・窟外のを全部網羅して、之に靈裕塔のを加へれば、七階佛名が完全に具備する。而もその他の佛名は一つも見えぬ。これから見る時は、懺悔文の中に、必ず廿五佛名及び十方佛名も加へられてあつたと想像せられるのである。是等七類の佛名は、靈裕が勸請せるものである。信行以後の三階教徒が、その普佛普法の教義に應ぜんが爲に、歸依敬禮せる七階佛名は、必ず之と必然の關係を有すると思はれる。

五、傳法二十四祖

この二十四祖は、魏の曇曜の譯せる「付法藏傳」の列祖である。曇曜は、北魏武帝の廢佛の際に、雲岡の石窟寺に退隱して、この「付法藏傳」を翻譯したとあるが、恐らくは撰緝であらう。その意、法藏の長くこの世に持續せんを念じたのであつた。恐らくは曇曜自身、二十四祖の後を繼がんと期したのであらう。今や北周及び北齊の廢佛に遭遇せる靈裕は、曇曜の心境をそのまゝに、否一層深刻に自分に感じたのである。この列祖の名を、自己の開鑿せる石窟內に刻せるの意は、同じく法藏の永遠に持續せんを願ふに外ならぬのである。大住聖窟と、自ら之を命名せるにても、之を察する事が出來る。人力によつては如何ともし難きものあるを豫想して、こゝに那羅延天を勸請し來つて、その金剛性力によつて住持せしめん事を願うたのである。

那羅延神王を勸請せるは、同じく「大集經」月藏分第十二、建立塔寺品に基づくと思はれる。中に、過去諸佛建立住持大塔として、那羅延窟を擧げて居る。迦毘羅神王も、また「大集經」月藏分第十二、分布閻浮提品に基づくと思はれる。中に震旦國を迦毘羅夜叉大將等に付囑して之を護持し、一切の鬪諍・怨讐・忿競・交戰等を休息せしめ、以て法眼を久住し、三寶の種を紹ぎて、斷續せざらしむべきを命じ、大將等が共に震旦國土を護持せんと誓へる事が說かれて居る。靈裕が、是等二神王を刻せる趣旨、こゝにある。予は、斯の如き二神王の像を、他に於て見た事が無い。恐らくは、靈裕の造りしこの寶山のが、唯一では無らうかと思ふ。而もそれが「大集經」月藏分に基づけりとせば、靈裕が如何に此經を心肝に徹せしめたかを卜するに足るのである。「華嚴經」の中に、眞丹國の菩薩住處として、那羅延山の擧げられて居る事も、こゝに參照すべきである。

經の五五百年の豫言によれば、靈裕の時代は第四の五百年たる多造塔寺堅固に入らんとせる時機である。靈裕が、朝召を强ひて辭し、熱血を濺ぎて寶山寺を經營し、この石窟を造つたのは、多造塔寺の經說を實現せんが爲であつたに相違ない。道宣は、石窟につきて、「面別刻三法滅之相」と言つて居るが、相を刻したのでは無い。法滅に關せる經文を刻したのである。靈裕が精神を凝集せる是等の經文が、如何に當時の教徒を感動せしめたかは、道宣が「每春遊山之僧、皆往摹二其文理一、讀者莫レ不二歔欷而持レ操矣一」と記せるにて、之を知るべきである。「滅法記」を著はし、「寺破報應記」を撰せる靈裕の護法の熱情が、この造窟あらしめたものであるから、支那の石窟中、これの如く偉大なる學德を背景に有するものは無い。而もその動機までもやゝ明白であるから、その規模は大きく無いが、石窟史上に大なる位置を與へてよい。この點より見れば、靈裕は實に傳法廿四祖の後を繼いだ人と言つてよい。此石窟は長く埋れて居たが、大正十年を以て再び世に現はれた。靈裕の寂後正に一千三百十六年を經て居る。令法久住の志願空しからずといふべきである。

六、靈裕法師

信行禪師との關係を見んには、先づその傳記を知らねばならぬ。靈裕は魏の神龜元年（西曆五一八）の生、信行は東魏の興和二年（西曆五四〇）の生であつたから、信行は靈裕より二十二歳の年少であつた。その入寂は、信行は開皇十四年（西曆五九四）年五十五歳であり、靈裕は其後十一年を過ぎて、大業元年（西曆六〇五）年八十八歳であるから、この點から見れば、前後の關係が顚倒するけれども、靈裕の信行に長ずる事二十二歳なるに、先づ留意せねばならぬ。

靈裕は、慧光僧統に隨はんとして鄴下に至つたが、恰も寂後七日なるに會して、道憑の弟子となつた。その時靈裕の年齡は、「續高僧傳」に記されずして、「荏苒法席、終于三年、二十有二、方進具戒」とのみ言つて居る。古來、慧光の寂年も年齡も不明であるが、普通の約束より見れば、靈裕の出家の年は二十歳であらうから、東魏天平四年（西曆五三七）が、慧光入寂時となる。然るに貞觀六年（六三二）靈裕の弟子海雲が、その師の灰身塔の左右に加へた碑文の中に、「師時十八、出家求學」とある。弟子の文中に、誤謬はあるまいから、これを依用すれば、靈裕の出家は天平二年（西曆五三五）となり、それがやがて慧光入寂の年である。これは復產物であるけれども、靈裕の研究より得た、予に取つては一つの收獲である。慧光は、北魏佛教界の明星で、地論宗の初祖でもあり、四分律宗の祖師でもあり、また菩提達磨を毒殺したなどと誣ひらるゝ程までの禪師でもあつた。その年時を規定する事は、佛教史の闡明上、頗る重大な一事件である。

道憑に從學した靈裕は、博學によつて裕菩薩と稱せられた程であつた。道憑の寂後、その衣鉢を嗣ぎて寶山寺に住し、周の武帝が、北齊を亡ぼし、從つて北齊の佛法を滅せる大厄難に遭遇し、この時、山間に退きて、晝は俗書を讀み、夜は正理を講じて、內外に亙れる多くの著述を爲した。隋代に至り、佛法を回復せる時、都統に承げられたが、辭して受けず、文帝の三回の請により、七十四歳の高齡を有しながら、官乘に乘らずして、開皇十一年（五九一）歩して遠く長安に入り、大興善寺に迎へられ、國統に擧げられしも、また强ひて辭して山寺に還つた。靈裕の意は、山寺の經營にあつたので、文帝は綾錦衣服絹三百段を送つて、その營造を助け、御書「靈泉寺」の勅號を加へた。この寺、もと大慈寺の稱であつたが、文帝は靈裕の一字を取り、八山の泉を加へて、以てその名を不朽ならしめたのである。晩年、演空寺に住し、大業元年（西曆六〇五）年八十八歳の高齡を以て、念佛の聲と共に入寂したので、その一生の心血を濺げる靈泉寺に葬り、側に塔を起したのであつた。その著述は、內外に亙り實に多端極まる中に於て、周武廢佛の苦楚を嘗めた反映と見るべきものは、「滅法記」・「寺破報應記」である。また護法精神の迸りと見るべきものは、「聖迹記」・「佛法東行記」・「齊世三寶記」の如きものであつた。靈裕は、著述於て隋代の博學淨影寺慧遠と相若く程の名望があつたが、その戒行に於ては、遙に慧遠を凌駕した。之を證明すべき材料が、「續高僧傳」の中にも、靈裕塔內の靈裕傳の中にも、傳へられて居る。「高僧傳」の中には、次の通りに出でゝ居る。京輦に於て淨影寺に入り、正に布薩に値ひ、徑ちに堂中に坐す。遠公の說欲を見、抗聲していふ、「慧遠讀疏、而云法事因緣、衆僧聽戒、可是魔說」と。同座驚起し、怪んで其言を斥す。識れるもの、遠に告ぐ。遠趁つて堂に詣れば、裕いふ、「聞仁弘法、身令易傳、凡習尙欣、聖禁寧准」と。遠、頂禮して自ら誡め、泣を銜んで之を受け、是に由つて、終に至るまで、遠常に赴集したのであつた。道宣は、最後に靈裕を贊して、「自東夏法流、化儀異等、至於立敎施行、取信千載者、裕其一矣」と言つて居る。これは慧遠の學、靈裕の行を知らしめる屈强の材料である。靈裕塔內の靈裕碑には、少し書き方を異にして居る。曰く、一夕布薩說戒す。靜影惠遠法師、涅槃經疏を造り、詳練僉覆、此に緣りて傳欲す。師、聲を勵ましていふ、惠遠讀疏して、是れ法事因緣と言ふ。衆僧の說戒は、豈是魔說か。遠聞いて之を憚り、それより筵に趁かざるなし。云々。これには傳欲とあり、彼れに說欲とあるのは、說戒の席に列せず、他をして隨喜の意を傳へしめる事である。慧遠は經疏を造りつゝあるので、之に沒頭して說戒の席に列しなかつた。靈裕は讀疏のみが法事因緣で、說戒は魔說なりやと言つて、

之を難じたのである。說戒と讀疏とを對立せしめてある所を見れば、慧遠が造疏研鑽を以て佛法と爲せるに對して、靈裕が布薩說戒の中に佛法ありとせる意が見られる。如何にも二人の面目が現はれて居るといふべきである。慧遠は、此時に靈裕の身令體訓に頗る動かされ、淚と共に其忠言を頂戴したとあるから、これによつて靈裕の實行が天下隨一であつた事を想像すべきである。

靈裕の上に於て、特に感ぜられるのは、實行の嚴格な所にある。開皇三年、六十六歲の時、相州の都統に擧げられたが、靈裕は、都統の德にあらず、都統の用にあらず、其器に非るもの、之に從ふの事理あるべからずとて之を辭し、更に申請せらるるや、遁れて燕趙に遊んだ。又、開皇十年、七十四歲にして、文帝の再三の勅召に對して、到底固辭するを得ずして、相州より步して長安に入つたのである。いづれも百代の佛家たりし氣魂を見るべきである。その生平の生活狀態は、頗る儉素であつた。身に淸修を服して、綾綺を御せず。裙を踝上に垂れ、四指の衫袖、僅に肘と齊しく、祇支（掩腋衣）の極長も脛に至るのみ。もし衣制の度を過るを見れば、之を割かしめた。常に五條を服して、由來布を以てし、縱ひ繪帛を捧ぐるものあるも、終に以て人に惠み、祇支もまた爾りで、餘す所は幣納に過ぎなかつた。斯る儉素の生活であつて、而も前後施を行じて、悲敬を兼ね、袈裟を惠む事千領に過ぎ、疾苦に對して醫療を加へ、厚味を得れば先づ僧に奉じ、少しも貯納する事がなかつた。この行跡に對して、名を邀へる爲といふ非難があつたので、或人が之を靈裕に傳へた。靈裕のいふには、君子は名を爭ひ、小人は利を爭ふ。名を邀ふるを辭するに及ばぬ。或人はまた名を求むるは、畢竟利の爲であると言つたら、靈裕は、利を得たら名を失はんと言つた。或人は、詐つて善相を爲すのであると言つたら、靈裕は猶眞心より罪を爲すに勝ると答へた。

三階敎祖信行の生活が、頗る能く靈裕の生活に類する事に氣付く。苟しくも眞の出家たるものは、いづれも同轍であるとはいへ、靈裕の生活が、中に於ても特に秀でゝ居た事は、當時に於て既に他の非難までもあつたといふにて知られる。

七、結語

靈裕法師と信行禪師との間に於て、重要なる五五百年の末法觀、及び七類の佛名の普敬に於て、全く一致する所がある。これは決して偶然の一致で無い。殊に他に全く見られぬ七類の佛名の如きは、彼此の間に、必然の關係あるを推定して、少しの無理もないと思ふ。然らばいづれより、いづれに影響したものであらうか。

信行は東魏の興和二年（西曆五四〇）魏郡に生れ、相州法藏寺に於て、具足戒を捨てゝ、親ら勞役を執ること四十年の長きに亙り、開皇の初（西曆五八一）、年四十二にして、召されて京都に上つた。相州卽ち鄴都は、實に慧光・道憑・法上・靈裕等の師資が、連綿として法化を張つた所である。是等の諸師は、いづれも信行より法臘に於て長じて居た。信行よりいふ時は、道憑より若きこと五十二歲、法上より若きこと四十五歲、靈裕より若きこと二十二歲であつた。靈裕は齊の安東王婁叡の金貝を傾撒せるによりて、寶山寺を經始し、窟壁に五五百年の經說、及び六類の佛名を刻した。他の一類の佛名は、墓碑にあるから、七類が具備する。石窟は、開皇九年に成つた。是等五五百年說の信奉・七類佛名の普敬は、開皇十四年、年五十五を以て長安に寂した信行よりの影響を受けたものであらうか。予は寧ろ普佛普敬の信念は、靈裕或は當時の鄴都一般の有せる所のもので、信行が開皇初年入京する以前に、その影響を受けたと見る方が、穩當であると思ふ。

若し靈裕が信行を承けたとすれば、年七十四歲にして、文帝の勅召默止し難くして步して長安に入つた時の事とせねばならぬ。そは開皇三年で、信行の五十二歲の時であつた。この時、信行は、既に三階敎の敎義を說き、六時禮旋、乞食爲業の生活を爲して居たに相違ない。靈裕は、此時大興善寺に迎へられ、詔によつて集まつた衆僧は、望評して靈裕を國統に推し、何等の異詞が無つた程の學德であつた。にも關らず、强ひて辭して東歸した。而して短い滯京の間に、淨影寺に說戒して、

博學慧遠をもその筵に列せしめた程であつた。信行の教を聽き、信行の行跡を學んだなどといふ事は、到底考へられぬ。之に反して、信行が、具足戒を捨てゝ親ら勞役を執り、諸の悲敬に供し、禮道俗に通じ、單衣節食、時倫に挺出する生活を爲したのは、相州法藏寺に於てゞあつた。法藏寺の所在は分らぬが、靈裕の居た相州であるから、寶山から遠い所では無い。而してその生活樣式は、靈裕の上に見られる所のものである。異る所は、靈裕のは具戒を嚴守したにあり、信行のは具戒を捨てたにある。靈裕のは嚴正以て道俗に臨み、信行のは普ねく道俗を禮するにあつたが、これは人格性質の相違から來れる差違である。一は意志の人、他は信念の人である。悲敬に供し、單衣節食、勤儉努力の點に於て、實によく一致して居る。これは必ずしも靈裕の後を追うたとせねばならぬでも無からうが、靈裕の人格感化を計算中に置いても、差支無いと思ふ。當時の學德の傳記を見るに、多く同轍であるけれども、靈裕ほどに信行の行迹に類せる生活を爲したものは無いのである。

五五百年の經說や、法滅盡の經說に對する見方も、廢佛事件に出遇つた直後に於ては、或は期せずして敎徒の間に一致したものがあつたと考へても差支ない。必ずしも一方が他方に及んだと見ねばならぬ事も無い。然し特殊な七階の佛名に至つては、斯くまでに一致する事は、偶然で無いと思ふ。それもどこにも見られる樣な佛名か、或は一經に並說せられるものかでもあるならば、或は偶然に一致せぬ事もあるまいが、諸種の經說に散說せられ、且つ二種の十方佛名だの、廿五佛名だの、三十五佛名だの、五十三佛名だのといふ樣な特殊のものであり、而もそれがまた悉く一とまとめにして列擧せられ、而してこれを一まとめにしたものは、決して他に見られぬ所である。これをも偶然の一致といふならば、世に斯程の不思議は無い。これが偶然で無いとすれば、そこに前後の問題が起る。前後を見る事となれば、年齡の上から、地方の上から、又、學德名望地位の上から、靈裕の方が前で、信行の方が後とせられねばならぬ。これ予が、寶山寺を以て三階敎に必須の連絡がありはしないかといふ所以である。最後に、斯く靈裕より信行へと關係づけて見る時は、七階佛名の外に、靈裕に見られる盧舍那・阿彌陀・彌勒の三尊、猶一歩を進めて、阿彌陀信仰が、信行の方に如何に開展したものであらうかの問題が殘る。予は、信行の宗敎の性質上、普佛には止り得まいと思ふ。十數年以前故佐々木月樵君が三階敎を論じて、之を地藏敎とし、頗る吾人の耳を傾けしめた事があつた。予は必ずしも之を彌陀とし、或は盧舍那三尊とするのでは無い。唯普佛以上のものがありはしまいかといふ疑問を懷くのである。然しこれは、今日の所、後の問題として殘し置くの外はない。（昭和二年一月）

追記、善華月法師

三階敎徒であつた法藏碑の中に、「佛滅より今に千五百年、聖人見えず正法陵夷す。卽ち善華月法師・樂見離車菩薩あり、この絕紐を愍れみて、並に三階を演べしも、其敎未だ行はれずして咸弑戮に遭へり」といふ事が見えて居る。善華月法師といひ、樂見離車菩薩といひ、何としても支那に現存した歷史的人物とは見えぬ。恐らくは經說であらうと想うて居た所、果して善華月法師の名が、高齊天竺三藏那連提耶舍譯の「月燈三昧經」第八の中に見えて居る。それは次の樣な因緣である。

阿難が佛に向つて、一一の菩薩が菩薩行を行ずる時に、手足を截られ兩目を挑られる等の種々の苦を忍受して、而も菩薩を退轉せざる因緣を問うたに對して、佛は過去の善華月法師の事例を說かれたのである。佛あり、寶蓮花月淨起王佛と號した。この佛、般涅槃し已りて正法の滅せる後、末法の中に、無量の衆生は、その修多羅を厭惡し世に災害が多かつた。時に七千の菩薩あり、中に善華月法師あつて、說法化導して勇健得王の珍寶王城に至つた。王の官人が、悉く法師の前に敬禮して居るので、王は我が形貌が、法師の顏容の端正なるに如かざるを顧みて、法師が王位を奪ふに至らんを恐れ、法師を誣ふるに、官人に染心あるを以てし、千子に命じて之を殺さしめんとした。千子は王の敎を受けなかつた。王は、兒等だも尙その敎勅を受けない事によつて、益々伴侶なき孤獨の身をはかなんだ。時に難提といふ旃陀羅があつて、常に殺戮を事とし顧惜する所が無いので、王は重賞すべきを約して、之に命じた。難提は王勅を受けて、手に利刀を執り、比丘の手足耳鼻を割截し並

に兩目を挑つた。王はこの後七日の間園林に遊んだが、少しも樂しみを覺えず、而して道に棄てられた比丘の形色を見るに、少しも變らなかつたので、王はこの比丘の菩提に於て不退なりしを知り、之を殺さしめた自己の惡業の深きを悔恨して苦惱に堪へず、この因緣を以て、其後長時劫に亙つて、身分を割截せられ、所愛を施捨する事となつた。

佛は斯く說き終つて後、當時の勇健得王は我が身これなり、彼の千子は賢劫佛なり、蓮花上佛は花月法師これなり、魁膾はこれ寂王佛なりといはれ、我れ昔勝上の菩薩行を修してさへ、尙是の如き苦を受けたと結ばれたのである。

以上は經說であるが、この中に於て注意せらるべきは、正法滅せる後、末法の中にといふ所にある。その時に於ける菩薩善花月法師は、殺戮の難に遭うた。これが三階敎徒の注目せる所であつたに相違ない。經の上には、三階敎といふ樣な文字は見えぬが、敎徒から見る時は、末法時の說法がやがて三階敎なのである。敎徒は、末法時に於ける法師の殺戮に對して、これこそ敎徒の生活で無ければならぬといふ刺激を感じた事と思ふ。樂見離車菩薩に關しては、まだその經說を檢出せぬ。

天壽國について